グルの教えの深さ

私の人生を照らすたいまつ

ジャイヤ・サイバート

冬の季節、キャッツキル山地に雪が降るさまは、それはそれは美しいです。雪の一ひらはそれぞれ独特です。空中の雪片の舞は魅惑的です。覆うあらゆるものの形を取りながら、雪が地面を優雅に覆うさまにうっとりします。間違いなく、冬の季節は瞑想と精神的なリトリートを促します。

しかし、雪に関してはすべてが神秘的であるのと同じくらい、人間が生活し移動する場所では、道路の除雪が必要ですし、小道もシャベルで雪かきが必要で、窓や出入口の氷は取り除かなくてはなりません。ですから、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムにおける冬期の主なセーヴァーの一つは雪と氷の除去なのです。

私は SYDA ファウンデーションのスタッフです。そして非常に幸運なことに、私のセーヴァーの任務は広範囲にわたります。（対照的に、ほとんどの同僚は指定されたセーヴァーの領域でやり遂げるべき任務がかなり特定されています）。時には、私は湖に行きチェックする機会があります。廊下を掃除しに行くこともあります。木の剪定(せんてい)をする人を監督しに行く時もあります。ライブ動画配信されるシッダ・ヨーガ・サッツァングで話をする機会もあります。若い人たちとのミーティングを行い、アーシュラムでセーヴァーをささげることに対し彼らを乗り気にさせる機会もあります。また、物事を前に進めるやり方をよりよく理解するために、時には年上のスタッフに会ってさまざまなセーヴァーの話題や任務の歴史について学ぶこともあります。

時には、動かないコンピューターを修理しに行く時もあります。水漏れの修理もします。スワーミ・アカンダーナンダが導く瞑想ワークショップに参加する機会もあります。テンプルでアーラティーを行うこともあります。また、アーシュラムに両親と住んでいる４歳のローヒトの先生になることもあります。彼の両親もまた決められた部門でセーヴァーをささげています。

これで、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムにおける壮大なセーヴァーの世界で、私の一日がどのように展開していくかを垣間見ることができるはずです。長年にわたってグルマーイは、若い人たちにさまざまな部門でセーヴァーをささげる機会が与えられることを確実にするように、シッダ・ヨーガ・アーシュラムのマネジャーや部門の責任者に要請してきたと聞いています。このようにすることで、若い人たちはさまざまな技能を学びます。自分の才能や能力を磨きます。シッダ・ヨーガのミッションやそれが包含するすべてのことを、より広く理解するようになります。その上、将来 SYDA ファウンデーションへの奉仕から移行する時、どのような活動においても成功する能力を十分に備えておくのです。

さて、冬の季節の話に戻りましょう。2022 年２月上旬のある夜、アヌグラハの建物の前のシヴァ・ナタラージュの像の炉に氷がたくさんたまっているというメッセージを、グルマーイから受け取りました。その氷は目障りで、特にまだ冬の真っただ中なので、自然に解けるまでにはかなり時間がかかりそうでした。早く溶かすには、何かする必要がありました。そこでグルマーイは、翌日に炉に火を付けるよう、私に要請したのです。

そこで朝一番に、私はシヴァ・ナタラージュの像の所へ行き、火をおこし始めました。氷の厚さを見た時、溶かすのに強い火力が必要だと分かりました。私は火を付け、1

時間ほど次から次へとまきをくべました。炎はどんどん大きく強くなり、炉の縁から 1 メートルほどの高さまで燃え上がりました。それに見入り、関わっていると、心を奪われました。その曇った冬の朝、すべてが眠り、地面が白やグレーもしくは茶色で控えめな時、この炎は鮮やかな黄色がかったオレンジ色でほとばしるように動き、パチパチ音を立てていました。

セーヴァーの任務をうまく完了させた時はいつでも、私は内側にある種のマインドの平和、慈悲深い存在を感じます。氷が解けるのを見ていた時、同じ感情が湧き上がりました。私にとって、グルマーイが私に要請したことを完遂することは、他のどんなこととも比べられないような感情を引き起こします。グルマーイの指示に従うことによって、シヴァ・ナタラージュが火と雪に囲まれ、このようにたたえられるのを見る機会も与えられました。シヴァ神は、どちらも大好きなのです。

火をおこしている時、私は３人のスタッフと別々に会話しました。彼らは自分のオフィスへ行く途中にたまたまシヴァ・ナタラージュの所を通ったのです。３人ともそれぞれ、この驚くべき火を見て少しの間立ち止まり、私に尋ねました。「今日は祝祭日ですか？」 私は聞かれるたびに、単純に「いいえ」と答えました。

その朝、後になって、私は嬉しいことにアヌグラハのロビーでグルマーイとのダルシャンを持ちました。私はグルマーイに、その朝早くシヴァ・ナタラージュの所で火を燃やし、すべての氷を確実に溶かすために大きな火をたかねばならなかった、と知らせることに決めました。

グルマーイはほほ笑んで言いました。「そうしてくれてありがとう、ジャイヤ。たとえ冬の季節の間でも、シヴァ・ナタラージュの前には通常火がともされます。特にマハーシヴァラトゥリーには。炉を管理する人が、もういないようですね」

グルマーイが、私の言っていることにとても興味を持ち、炉の大切さについて私に説明したので、私は３人のスタッフがそれぞれ私に今日は祝祭日かと尋ねたことをグルマーイに話そうと思いました。私はなぜそのことを話したのかよく分かりません。その瞬間にただ私の心に思い浮かんだので、そうしてみたのです。

私の話にグルマーイは熱心に耳を傾けていたようでした。すかさず、「あなたはどう答えたの？」と、グルマーイは聞きました。

自分の返答が重要だとはそれまで思ってもいなかったので、私はグルマーイの質問にびっくりしました。それで、「いいえ、と言いました」とだけ言いました。

グルマーイは、信じられないといった様子でした。「あなたは彼らに、いいえと言ったの？」と、尋ねました。「それだけ？ いいえ、と言ったの？」

私は、「はい、それだけです。それ以上は何も」と言いました。

グルマーイは、「なるほど、ジャイヤ、今日、あなたは非常に貴重なことを学ぶでしょう」と、私に言いました。

グルマーイがこう言った時、私は耳をそば立てました。グルマーイがこれから言おうとすることを受け取りたい気持ちでいっぱいでした。

グルマーイは言いました。「ねえ、ジャイヤ。あなたは少し違う対応ができたでしょう。人々が祝祭日かどうかあなたに尋ねた時、ただ、いいえと言う代わりに、熱意を

込めてこう言えたでしょう。『はい、祝祭日です！シッダ・ヨーガの道では、すべての日が祝祭日です。毎日が神の日です。毎日が神を崇拝する日です！』」

グルマーイは、1993 年にシヴァ・ナタラージュの前に初めて炉が置かれてから、シヴァ神の前で神聖な火が、何年もの間、毎日ともされていたことについて話しました。そして今、たとえ物理的な火が毎日燃えていないとしても、その神聖さ――その崇拝の意図――は、常に存在しています。さらに、シヴァ ・ナタラージュの像はアーシュラムの正面に飾られています。ですから、アーシュラムでセーヴァーをささげているすべての人たちは、神のエネルギーはこの場所で生き生きとしているという気づきを持つべきです、と。

グルマーイはさらにこう説明しました。「ジャイヤ、もしあなたが 『毎日が神の日です』と答えるなら、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムで長年にわたってセーヴァーをささげてきたすべての人たちへの注意喚起となるでしょう。このアーシュラムの中ですら、毎日のプージャーの目的を忘れてしまうことがあります。ともすのがディーヤーであれ、オイルランプやろうそく、シヴァ・ナタラージュの前の火であれ。あなたが彼らの問い掛けに熱意をもって答え、事の真実を彼らと分かち合えば、火をともすのを単に『特別な時』や『特別な祝祭日』を意味するだけだと考えるかもしれない人たちへの注意喚起となることでしょう」

グルマーイの話を聞き、私は深く祝福されたと感じました。私はグルマーイの教えを受け取ったと理解し、それを愛を込めて心に抱き留めました。

もう一つ気づいたことは、グルマーイに指示されたことをただ実行するだけで、古くから続く崇拝の伝統――神の前に火をともしてその偉大な力をたたえ、神が授ける祝福を呼び起こすという伝統――に、自分が参加していたということでした。私は、グ

ルマーイがどのように炎にささげ物をしていたか、今まで何回も見てきたことを思い出しました。事実、私のお気に入りの話の一つで、グルマーイがそのようなささげ物をする様子がシッダ・ヨーガの道のウェブサイトに載っています。グルマーイが、2015 年の自身の誕生日のお祝いの時、シヴァ・ナタラージュの前で火にささげ物をしたときのものです。

もう一つ、重要な体験もありました。その朝、シヴァ・ナタラージュの前とグルマーイのダルシャンで起こったことが、グルの言葉の力に対する私の認識を高める助けとなったのです。グルの言葉の一つ一つは、時にはありふれたものに思えても、より深い理解を与え、人をサーダナーの目的に導きます。私の場合、グルマーイが言ったのは、「氷を溶かすために火を付けなさい」ということだけでした。そして、私はこれからの人生を照らすたいまつを受け取ったのです。

***

２月のその朝に火を付けて氷を溶かした結果、思いがけなく良いことがありました。その一つは、シヴァ・ナタラージュの規則正しい崇拝が再開されたことです。グルマーイの要請で、この春から、別のスタッフが毎朝シヴァ・ナタラージュの前で火をともしています。

私がグルマーイから受け取った教えから、この他にも多くの良いことが展開するのを目の当たりにしています。次はその一例です。

今年のある時、私はシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムで年上のスタッフの一人と、この崇高な話を分かち合いました。その人は、シッダ・ヨーガの教えに全身全霊をささげ、セーヴァーに献身する姿にずっと私が憧れていた人です。炉で起こった

こととグルマーイが与えてくれた教えを私が話すと、そのスタッフの目は輝きました。そして、グルマーイが何年も前に語った話を教えてくれました。それは、アメリカ先住民の伝統からの、「命の歌」と呼ばれる物語でした。

この物語の要点は、誰もがその人独自の性質を保ち、表現する特別な波動、つまり「命の歌」をその魂に持っているというものです。この伝統では、子どもが生まれる前、コミュニティーの人々が集まり、その子の命の歌を見つけるために、祈り、瞑想します。子どもの魂に同調できると歌が見つかり、それを母親とまだ生まれていない子どもに歌って聞かせるのです。そして子どもの人生を通して重要な節目に、コミュニティーは集まり、命の歌をその子に歌って聞かせ、その子の真実で独自の性質を思い出させるのです。

そのスタッフがこの話をしてくれた時、私は、分かち合うことがシッダ・ヨーガの道でいかに強力なものであるかを理解しました。グルマーイの指示に従った体験を分かち合ったからこそ、私はもう一つの英知の贈り物を受け取ったのです。

© 2022 SYDA Foundation. 著作権所有。